

問題・解答 用紙番号	32
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者

看護学部、農学部【理系科目型】

問題は100点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(10点)

- 1 日本の高齢化率は上昇傾向でスライしている。
- 2 リスクを低減させるためのソチを検討する。
- 3 日頃の研究成果を社会にカンゲンする。
- 4 老朽化した家屋をシユウゼンする。
- 5 担当者のジンソクな対応に感謝する。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

一九六三年が大江健三郎^Xにとって重大な転機¹の年だったということは、これまでしばしば指摘されてきた。転機とされる理由は、第一に長男の出生、第二に広島取材である。大江の長男が頭部に大きな肉瘤をつけて生まれたのが一九六三年六月二三日、大江が取材のために広島を訪れたのが八月の初旬だった。日大病院で肉瘤を除去する手術を受けたが、障害は残るだろうと言われたという。その子どもと共に生きるということ、そして広島^Aの被爆者と向き合うということ。二〇代後半のまだ若い大江は、この大きな二つの課題を、一九六三年のわずか数カ月¹のうちに両手に抱え込むことになり、二つの課題を **1** のテーマとした。一九六三年が転機と言われるゆえんである。

大江は長男・光が誕生したときのことについて、繰り返し語っている。以下では、それらの記述を総合して、^A長男の出生について確認しよう。頭部に畸型をもつて生まれた長男を見舞う大江は、ある日、大学病院の特児室に横たわる長男を見つめていた。長男は手術する必要があるが、手術をすると生涯にわたって障害が残るだろうと医師に言われていた。手術すべきかどうか決心がつかない大江を、「なにものかが強く一撃」した。そして、大江は医師の研究室に急いで、手術を願いだった。このときに自身を襲った「なにものか」の一撃の意味を、大江は二〇年以上たつてから、言葉で理解することになる。その言葉に至るまでに、長い年月が必要だったのだろうし、ずっと「なにものか」にこだわり続けたからこそ、その言葉に出会えたのだろう。それは、宗教学者エリアーデの日記の英訳にあった「顕現としての人間存在の破壊されえぬこと」という言葉である。目の前の息子は生きている。彼がここに存在していることは、仮に神であったとしても、無にすることはできない。息子を放棄すれば、自分の人生もまた無意味なものになるだろう——。こうして、「障害のある息子と共生してゆくということは、どういう意味か、と考えつづける」ということが、大江の小説の「第一の主題となった」のだった。それは同時に、「核兵器の脅威にさらされている時代において、障害のある息子と、無力な人間である父親がどのように生きてゆくか」ということでもあった。

息子との共生は、大江の生活と文学を大きく変えた。海外の大学で教えるために長期間出国することはあっても、日本にいる間は二日以上家を空けることはなく、ほとんど毎日、光がいる居間で本を読むか、文章を書くという生活を続けることになる。大江が現代を核時代と捉えて核エネルギーの問題に入り込んでいくのも、「祈り」を口にするようになるのも、この息子の誕生とは切り離しては考えられない。

では、障害を抱えた息子を家族に迎えた新生活から、いかなる希望を見出すことができるのか。若い大江は絶望に近い場所から始めねばならなかった。『ヒロシマ・ノート』(岩波新書、一九六五

年)の冒頭は、^B一九六三年の広島取材について、以下のように陰鬱に記述している。

このような本を、個人的な話から書きはじめるのは、妥当でないかもしれない。しかしここにおさめた広島をめぐるエッセイのすべては、僕自身にとつても、また、終始一緒にこの仕事をした編集者の安江良介君にとつても、おのおのきわめて個人的な内部の奥底にかかわっているものである。したがって僕は、一九六三年夏の広島にわれわれがはじめて一緒に旅行したときの、ふたりの個人的な事情についてかきとめておきたいのである。僕については、自分の最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま恢復のみこみはまったくたたない始末であつたし、安江君はかれの最初の娘を亡くしたところだつた。そして、われわれの共通の友人は、かれの日常の課題であつた核兵器による世界最終戦争のイメージにおしつぶされたあげく、パリで縊死してしまつていた。

さらに大江は、燈籠流しの燈籠に生まれたばかりの息子の名前を書こうとして安江良介（一九三五）の死を告げる。後に岩波書店社長）に制止されたとも書いている。自分の息子が長くは生きられないかもしれないという暗い思いに襲われていたのだろうか。なお、岩波書店の編集者・安江良介と大江との関係は、一九六〇年の「怒れる若者たち」ノート（『世界』一九六〇年三月号）から、一九九八年の安江の死まで長く続いた。

大江は一九六〇年にも一度広島を訪れている。しかし、一九六〇年の取材と、一九六三年夏の取材とは性質が異なつていた。「最初の息子が瀕死の状態」であるという個人的危機と、友人・田中良の自殺、そして広島の被爆者の現状が大江の内部で響きあつたことによつて、大江は広島と出会い直したのだ。

大江が広島を訪問した目的は、第九回原水爆禁止大会を取材し、『世界』にそのルポルタージュを発表するためだつた。第九回大会は部分的核実験禁止条約の評価をめぐる対立に終始した大会として知られる。一九六三年八月に米・英・ソによつて調印された部分的核実験禁止条約は、冷戦下の国際政治の達成として当時の日本のマスコミは評価したが、フランスと中国は猛烈に反対していた。既にある程度の核戦力を保持していた米・英・ソは核兵器の水平的拡散を望まなかつたが、仏・中からしてみればこの条約は米・英・ソによる核兵器の独占以外のなにものでもなかつたのである。この部分的核実験禁止条約の評価をめぐつて第九回原水爆禁止大会は紛糾し、最終的に分裂してしまふ。そして、大江は、政党が主導する議論の対立と停滞とは距離を置き、大会には反映されないであろう個人の声を聞き取る取材方針に切り替えた。

広島で大江が取材した個人のなかで、^C大江が特に重視した人物が二人いる。一人は金井利博（一九一四）である。金井は、当時『中国新聞』の論説委員を務めながら、「原爆被害白書」

の制定運動に関わっていた人物である。金井は、関東軍建設団司令部の主計中尉として満州で敗戦を迎えたため、被爆経験はない。もう一人は、原爆病院の院長・重藤文夫である。

大江は、『ヒロシマ・ノート』において、この二人の紹介に紙幅を割いている。では、大江はこの二人のどこに共感したのだろうか。

大江が注目したのは次のような金井の姿だった。原水爆禁止世界大会の分科会の席上で、原水爆を保有する権力や、原水爆に守られることを望んでいる権力に対して、広島の人びとは本当に怒っているのだろうかという質問が出た。それに対して、金井は、涙ぐまんに激高して「庶民にも怒りはあるが、それを表わす方法に迷っているのではないか？ われわれもそれに迷っているのではないのでしょうか？」と答えたという。大江は、金井の姿をみて、金井が「被爆して死んだ者たちの声において語ることを願っているジャーナリスト」だと認めたのだった。

金井が提示し、大江の心を打った言葉に、「被爆者の同志」がある。自分は被爆者ではないが、それでも被爆者とともに運動をする金井は「被爆者の同志」であろうとした。大江は「われわれがこの世界の終焉の光景への正当な想像力をもつ時、金井論説委員のいわゆる《被爆者の同志》たることは、すでに 2 ではない。われわれには《被爆者の同志》であるよりほかに、正気の間としての生き様がない」と主張し、自身も被爆者の運動に関わっていく。

次に重藤文夫について確認しよう。重藤については、大江は次のように「正統的な人間」という呼び名を与えている。

広島の実現を正面からうけとめ、絶望しすぎず、希望をもちすぎることもない、そのような実際の人間のイメージがうかがいがつてくるように思われる。僕はこのようなイメージの人間こそを、正統的な人間という名で呼びたいのである。二〇年来、広島に固着している状況は、たとえ百人の正統的な人間群が、それに対抗するにしても十分とはいえない苛酷な状況であった。しかし、それでもなお、まったく勝算のない、最悪の状況に立ちむかいうる存在とは、やはり、このように正統的な人間よりほかにはない。僕は、重藤文夫博士に、その正統的な人間の一典型を見るものである。

「正統的な人間」という呼称は、いかに生きるべきかという倫理に関する大江の信条を如実に示している。初期小説で描かれた「勇者」「英雄」とも接点を有する大江の思考の特徴であろう。「共同体を背負う一人ひとりの個人」という発想は、大江のみならず、近代主義的な当時の知識人に共有されていたが、個人の倫理に一種の「正しさ」を求め、欺瞞に敏感な潔癖さに、大江の特長があった。

つまり、大江がヒロシマ・ノートで提示したのは、次のような見解である。被爆者と非被爆者と

の間にある意識の隔たりを埋め、広島（と長崎）とそれ以外の地域（外国を含む）との断絶を埋めるといふ、極めて困難な目的に向かって進む「正統的な人間」に自分たちも連なるべきだという見解である。それは、以下の引用部分に端的に表れている。

われわれ、偶然ヒロシマをまぬがれた人間たちが、広島をもつ日本の人間、広島をもつ世界の人間、という態度を中心にすえながら人間の存在や死について考え、真にわれらの内なるとロシマを償い、それに価値を与えたいと希うなら、ヒロシマの人間の悲惨→人間全体の恢復、という公理を成立させる方向にこそ、すべての核兵器への対策を秩序だてるべきではないか。

3、^D「ヒロシマ」という片仮名表記や「広島をもつ世界の人間」という表現から、この時点での大江の問題意識が「人類にとつての核兵器」という普遍的課題に接続し得ていたとするのは、やや早急だろう。むしろ、大江は、^D広島から人類に至るスプリングボードとしての「日本」の役割を強く意識していた。次の引用は『ヒロシマ・ノート』のなかで、東京オリンピック中に行われた中国の核実験について述べている部分である。二一世紀初頭の日本社会は、アジアのなかで北朝鮮の核兵器のみを問題にし、アメリカと中国の核兵器についてはほとんど議論されない。こうした現状を鑑みれば、一九六四年当時、東京オリンピックというイベントと並んで、アジアの核兵器という問題が議論されていたことを思い出しておきたい。大江は、中国の核実験に触れて、まず日本人が変わらねばならぬ、と述べている。

中国の核実験にあたって、それを、革命後、自力更生の歩みをつづけてきた中国の発展の頂点とみなし、核爆弾を、新しい誇りにみちた中国人のナショナリズムのシンボルとみなす考え方がおこなわれている。僕もまたその観察と理論づけに与する。しかし、同時に、それはヒロシマを生き延びつづけているわれわれ日本人の名において、中国をふくむ、現在と将来の核兵器保有国すべてに、否定的シンボルとしての、広島原爆を提示する態度、すなわち原爆後二十年の新しい日本人のナショナリズムの態度の確立を、緊急に必要とさせるものであろう。したがってヒロシマの正統的な人間は、そのまま僕にとって、日本の新しいナショナリズムの積極的シンボルのイメージをあらわすものなのである。

大江が述べているように、確かに核開発はナショナリズムとの結び付きが強い。核実験の成功をフランスの栄光だとしたドゴール、核実験直後の行軍演習を映したフィルムを民衆に見せつけた毛沢東などの例は誰もが思い浮かぶところだろう。核開発は、栄光と自立のシンボルとして国民の熱烈な期待を煽るものでもあった。中国やフランスとは逆の方向の、核兵器を拒否する国民的態度を

確立するべきだ、という大江の主張がうかがえる。

大江は別のエッセイで、自分は日本を見捨てる権利は持っているが、それでもなお「自分の自由な意思において、日本人であることを選びつづけている」とも書いている。『トロシマ・ノート』刊行の時点での大江の核意識は、その根底において「日本および日本人はどうあるべきか」という巨大な問いとつながっていたのである。

大江自身はのちに「原爆の問題についても、小説を書く際に困難にぶつかって毎日それに向かって一五時間やるというほど一所懸命にはやらなかった」と述べている。それはそうかもしれないが、^{*}「見るまえに跳べ」以降の作品における特徴と、広島との向き合い方の特徴には「日本のナシヨナリズム」という共通点があったのであり、^E小状況にこだわることによつて大状況を捉えるという「全体性への回路」とでも言うべき信念が、大江が書く小説と時事的評論と、それを読む受容者たちに共有されていたと言えるだろう。

(山本昭宏『大江健三郎とその時代 「戦後」 に選ばれた小説家』一部改変)

* 「見るまえに跳べ」……一九五八年に発表された大江の短編小説。

問一 二重傍線部 X 「大江健三郎」の著作を、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 砂の女
- イ 飼育
- ウ 金閣寺
- エ 野火
- オ 暗い絵

問二 空欄 1 と 3 に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | |
|--------|-----------|---------|
| 1 ア 暫定 | 2 ア 妥当な選択 | 3 ア ただし |
| イ 喫緊 | イ 任意の選択 | イ つまり |
| ウ 将来 | ウ 責任を伴う選択 | ウ そして |
| エ 終生 | エ 持続可能な選択 | エ 確かに |

問三 傍線部 A 「長男の出生」と大江健三郎の関係について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 手術をすると生涯にわたって障害が残ると医師に言われた大江は、当初は長男の手術をする決心がつかなかった。

イ 自身を襲った「なにものか」の一撃の意味を明確に理解した大江は、医師の研究室に急いで長男の手術を願い出た。

ウ 大江は障害のある長男との共生を小説の「第一の主題」とし、同時に核兵器の脅威の時代をどう生きるかを問うた。

エ 大江はエリアーデの日記の英訳にあった言葉を通して、長男の存在はたとえ神であっても否定できないと考えた。

オ 大江は長男の出生をきっかけにして、核エネルギーの問題に入り込み、また、「祈り」を口にするようになった。

問四 傍線部 B 「一九六三年の広島取材」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 大江は紛糾した第九回原水爆禁止大会から距離を置き、そこには取り上げられない個人の声を広島で聞き取ることにした。

イ 子に関して同じ境遇にあった編集者・安江良介とともに仕事をしたため、一九六〇年の時とは性質が異なる取材となった。

ウ 部分的核実験禁止条約にフランスと中国が猛烈に反対したため、大江は広島で取材した個人の声を反映させる方針に切り替えた。

エ 『ヒロシマ・ノート』におさめたエッセイは、大江と安江良介の個人的な事情を書きとめることに終始した内容となった。

オ 第九回原水爆禁止大会を取材した大江は、調印された部分的核実験禁止条約を冷戦下の国際政治の達成として評価した。

問五 傍線部C「大江が特に重視した人物が二人いる」とあるが、この二人のどのようなことに対して大江は共感しているか。次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 原水爆に対してどのように怒りを表せばよいか迷っている庶民の事情をよく理解している金井利博の回答に対して。

イ 原水爆を否認する権力に広島の人びとは怒っているのかという質問の答えに窮して涙ぐんだ金井利博の態度に対して。

ウ 被爆経験のない金井利博が、被爆して死んだ者たちの声において語ろうとしたジャーナリストとしての姿に対して。

エ 広島の実態を正面から受けとめても絶望もせず希望ももたない、重藤文夫の実際的な人間のイメージに対して。

オ 重藤文夫から、広島に固着している最悪の状況に立ちむかいうる正統的な人間の一典型が見られることに対して。

カ 重藤文夫の、欺瞞に対して潔癖であり、共同体から背をむけてでも個人の倫理に正しさを追求する姿勢に対して。

問六 傍線部D「広島から人類に至るスプリングボードとしての「日本」の役割」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 東京オリンピックというイベントを利用して、日本はアジアの核兵器という問題を議論する機会とすべきである。

イ 中国やフランスと同様に、日本は原爆を栄光と自立のシンボルとして国民の熱烈な期待を煽るべきである。

ウ アメリカや中国の核兵器について議論することは早急であり、日本は北朝鮮の核兵器のみを問題とすべきである。

エ 中国の核実験は新しい誇りにみちた中国人のナショナリズムであるため、日本はその追従に徹すべきである。

オ 広島の実態を提示することで、日本は核兵器保有国すべてに核兵器を拒否する国民的態度を確立すべきである。

問七 傍線部E「小状況にこだわることによって大状況を捉える」とあるが、具体的にどのようなことを指しているか。「息子」・「核」の二つの語を必ず用いて、七十字以内で説明しなさい。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

日本では、一九六五年（昭和四十年）あたりを境にして、人がキツネにだまされたという新しい話が発生しなくなる。もちろんそれは私が各地を歩いて聞いた経験からきているのだから、もつと丁寧に調べれば、少々異なった事実もでてくるかもしれない。といっても、ほぼこの時期に転換期が訪れていると考えてもよいだろう。私が話を聞いてきた経験では、そう断言してもよいほどに一九六五年という年は、大きな画期¹になっている。

このような「事実」を知ったとき、私は「なぜ一九六五年以降、人はキツネにだまされなくなっただろうか」という質問をするようになった。かつてだまされた経験があるという人にも、そういう人たちを知っている村の人たちにもよくそういう質問をした。そうすると「私はこう思うんだが」というような「答え」が返ってくる。その答えはいくつかのパターンに分けることができたが、ここではそのいくつかの説を紹介しながら、一九六五年頃の歴史の変化について考えていってみよう。

「答え」のなかで一番多かったのは、高度成長期の人間の変化を指摘するものであった。戦後史を簡単に振り返ってみると、戦後の日本は敗戦後の混乱から出発する。米軍の空襲によって焼跡となった都市、戦地から帰ってきた復員兵、食糧難。そういう時代をへて一九五〇年に朝鮮戦争がはじまる。米軍の後方基地になった日本では朝鮮戦争特需が発生し、それをきっかけにして経済復興がすすみはじめる。それを契機に、戦後の日本は、新しい生産体制の模索を開始した。こうして数年後には、戦後の高度成長といわれた時代を出現させる。

経済成長が統計的に現われてくるのは、一九五六年（昭和三十一年）からといってもよい。この年を境にして、日本のGDPは拡大しつづける。といっても生活のなかで高度成長が実感されるようになるのは少し遅れる。都市部では一九六〇年頃になると当時三種の神器といわれていた、テレビ、洗濯機、冷蔵庫をそろえる家が多くなっていた。その頃には家計収入も増加しはじめていたのである。

農村部では、実感としての高度成長はもう少し遅れる。それでも一九六〇年代に入ると家庭の電化がすすんだだけでなく、農業の機械化もはじまり、マキから灯油、プロパンガスへと燃料も急速に転換していった。たとえば山村の過疎化がはじまるのは一九五〇年代後半のことで、それを促進した大きな要素は燃料革命による炭焼の崩壊であった。炭焼に従事していた人たちが仕事を失ない、村から出て行ったのである。つづいて一九六〇年代に入ると、農山村の学校卒業生たちが都市で就職するようになる。高度成長によって都市では労働力不足が発生し、農山村の若者たちがその不足を埋めるようになっていった。

一九六五年とは、^Aこんな変化の上に成立するのである。

高度成長期を概観するときには、もうひとつ触れておかなければいけないことがある。戦後の歴史は、日本の政治的、軍事的敗北からはじまった。大東亜其栄圏、八紘^{はっくわう}一宇といった戦前の日本が描いた強国への道、アジアの盟主としての夢は砕け散った。この教訓をへて、戦後の混乱、復興を乗り切った日本は、新しい日本の方向性を、経済の発展、その基盤としての科学、技術の振興に求めるようになる。もちろん、政治、社会的には、戦後の日本の方向性をめぐって大きな対立が生じていた。軍事力の保持を放棄した絶対平和主義の道を歩むのか、それとも日米同盟のもとに「再軍備」をめざすのか。社会の民主化とは何か。

i、科学、技術を振興し経済発展をめざすという方向をめぐっては、このような対立が生じることはなかった。それは国民的合意として機能していたといってもよい。しかも一九五六年以降の経済成長によって、日本の経済は誰もが予想していた以上に高い成長を記録しはじめた。企業の生産の拡大が設備投資の拡大をうながし、それがまた生産を拡大させるという循環を実現させ、この過程で労働者の賃金も年々増加していった。

経済発展によって新たな大国への道を歩むという方向が、希望から確信へと変わっていった。経済発展にむかって邁進^{まいしん}していく社会を制約するものは何もなくなっていた。経済が戦後の日本を支配する「神」として君臨するようになったのである。

「戦後の高度成長によって人間が変わった」、「人間が経済的動物になった」、「経済的価値があらゆるものに優先する価値になった」。人間がキツネにだまされなくなった理由のひとつとして、戦後の経済成長をあげる人々はこんなふうに話した。人々は自然の価値も、それに経済的価値があるかどうかで判断するようになった。

それ以前の時代においても、人々は経済という側面を意識しながら暮らしていたことだろう。農山村でも、人々はけっして自給自足で暮らしてはいなかったのが日本の歴史である。さまざまな商品作物や商品としての加工品をつくり、一面では広域的な交易をもちながら村人たちは暮らしていた。だが、かつての農山村の人々にとっては、経済は暮らしのなかの一側面にすぎなかったのである。自分で作りだしたものも多かった。それ以上に、人々は経済とは違う尺度でさまざまなものを見、非経済的なものに包まれて自分たちは生命を維持しているという感覚をもっていた。自然の生命に包まれている。神々に包まれている。村の歴史や我が家の歴史に包まれている。いわば、そういうものの全体のなかに、一人一人の人間の生命もあった。

そういう感覚が、高度成長によって衰弱していったのである。それが人間の精神を変え、精神的なコミュニケーションのあり方を変えた。自然や神々、歴史などと自分との間に、大事なコミュニケーションが成立していることを感じながら暮らしていた人々が、その精神を衰弱させ、経済を媒介としたコミュニケーションを中心にして、自分の精神をつくりだすようになる。

そのとき、キツネからの働きかけに応じる能力を人間は失なった、と多くの人たちが推測する。ちょうど自然^Bが発しているメッセージを人間が読みとれなくなっていたように、キツネからの働きかけが読みとれなくなっていた。

人間がキツネにだまされなくなった理由として、^C「科学の時代」における人間の変化をあげる人々もいる。

敗戦のときに日本の人々がいだいた気持のひとつは、アメリカの生産力、科学、技術の力の前に「日本の精神」とか「大和魂」とかいうものが太刀打ちできなかったという思いだった。たとえば日米戦争がはじまる頃の日本とアメリカの鉄を生産する能力は、ほぼ一対十の割合である。すなわち、日本はアメリカの十分の一しか鉄を生産できない状況で、日米戦争を開始した。当時の言葉を使えば日米の「物量」の差は明確なものがあつた。戦争をすることがよいか悪いかの問題を棚上げしたとしても、この状況下で日米戦争を開始することは無理があつたという他ない。

ところが日本では、この「物量」の差を埋めうるものとして、日本、ならびに日本人の「すぐれたもの」が喧伝^{2. 喧伝}されたのである。日本は神国日本であるという語り、つまり日本は神が護る国だとされた。蒙古襲来^{2. 襲来}のときも「神風」が吹いて日本は守られたという語りである。

もうひとつ言われていたのは、日本人の優秀さという語りであつた。それは「大和魂」などに象徴される、天照大神の子孫としての日本人の精神力の高さという喧伝であり、もうひとつは日本人の器用さという喧伝であつた。そういうものがあることによつて、「物量」だけでは測れない力が日本にはある、とされたのである。確かに一面では零戦（零式艦上戦闘機）のような「すぐれた」戦闘機がつくりだされており、さらには敵の艦船に体当たりしていく「すぐれた」精神力をもった兵士の戦い方はアメリカを驚かせてもいたが、そういったものが「物量」面での日本の不利を補い、逆転させる力として語られていた。

だがその結果は、虚しく惨めな敗戦であつた。「神国日本」や「日本人の優秀さ」では「物量」の壁を越えられなかったのである。経済成長や科学、技術の振興に対する戦後の人々の強い希求は、この教訓の上に成立したといつてもよい。そしてそのことが、科学的に説明のつかないことを「迷信」「まやかし」として否定する戦後の精神風土をつくりだした。

私が小、中学生時代を過ごした一九五〇年代後半から六〇年代前半の頃は、「すぐれた子ども」は理工系に進むのが当然だ、というような社会的風潮があつた。科学的な思考、分析方法を身につけ、そのことによつて新しい技術を開発し、生産力の発展に寄与していく。そういう人間に向かつて進んでいく子どもが「すぐれた子ども」の像だったのである。

本当は、科学とは科学的方法によつてものごとを考察していく学問にすぎない。そこからは科学的方法によつてとらえられた真理がみえてくる。それを私たちは科学的真理と呼んでいる。だがそのことは、科学とは別の方法をとおしてみえてくる真理もまた存在するということを示しているは

ずである。たとえば人間はなぜ生きているのか、というような問いに対して科学は無力である。科学ができるとすれば、人間が生きているということを身体的構造のなかで明らかにすることだけであり、それを科学的真理として承認することに異議はないが、この方法では人間の生きる意味とはとらえられない。それは科学とは別の方法でつかみとられていくものである。

ところが戦後の日本にはそんな議論は通用しない雰囲気があった。科学的に説明できないものはすべて誤りという風潮が広がっていったのである。それが非科学的な「神国日本」とか「大和魂」「日本人の器用さ」などを信じた末に訪れた惨めな敗戦を経験した、戦後の日本人の信条であった。

このような信条からの自分の世界のとらえ直しは、すみずみにまで及んでいったのが一九六〇年代前半である。そしてキツネにだまされることが当たり前の話から迷信へと変わっていくのも、この時代のなかにおいてであった。もちろんそれ以前から、それを迷信だと思っていた人々もいるだろう。キツネに遭遇することのない都市の人々にとっては、それは遅れた田舎の人々の迷信だとは思えなかったに違いない。また農山村の人々のなかにも、科学的真理を唯一の真理だと考える合理主義者はいたはずだ。だがこの頃から、キツネの暮らす自然との間に科学的な認識を超越した関係を築いていた「伝統社会の人々」の間にも、科学的にとらえることを進歩的態度とみなす精神が広がっていったのも事実だった。

そのことが、科学ではとらえられない世界をつかむことのできない人間たちをつくっていったと多くの人が語る。そこにこそ、一九六五年頃から人間がキツネにだまされなくなった大きな理由があるのだ、と。

これまでみてきたふたつの説は、いずれも人間の何かが変わり、人間がキツネとのコミュニケーションをとれなくなったというものである。そして、第三の説もこの延長線上にある。

人々が語る第三の説は、情報、コミュニケーションの変化を問題にする。一九六〇年代に入るとこの分野ではふたつの大きな変化があった。ひとつは電話、第二はテレビの普及である。さらにもうひとつ、漫画雑誌をふくむ週刊誌などの増加を加えておいてもよい。

それはこういうものである。それまでも活字による情報としては新聞、雑誌があった。しかしそれは文語体で書かれた情報であり、日常語である口語体で伝えられる情報は、つねに伝達者である人間を伴っていた。人から人へというかたちで語り伝えられたのである。

もうひとつ、村に暮らす者たちの大事な情報源として自然がある。とりわけ農業にたずさわる者にとって必要なのは地域の「農業暦」とでもいうべきもので、それは一年の天候予想のようなものである。たとえば「寒試し法」というのがあって、これはいまでも一部の東北農民が利用しているが、寒の季節の自然、天候の変化から一年の気温変化や雨量変化を予測する。農民にとっては春や夏の天気、気温や雨量はきわめて重要なもので、それに合わせてその年の農業を工夫する。

それは日々の生活のなかにもあつて、蜂の巣のつくり方から台風の来方を予想したり、虫の行動の変化から雨が降るかどうかを予測するようなことは誰でもしている。山の色の变化からその年の季節の訪れ方を予想し、自然の花の開花から種播きの時期を決めるといったことも一般的におこなわれる。農民はたえず自然から情報を受け取り、それを活かしながら暮らしている。

ii かつての村人の得る情報は、新聞、雑誌などをとおして提供される文語体の情報（もちろんそれは明治の言文一致運動以降の文語体であるが）、人から人に伝えられる口語体の情報、自然から得る情報があり、日常世界と密接な関係にある情報は口語体の情報と自然からの情報であった。

一九六〇年代に入つて変化したのは、第一に口語体の情報である。もともとそれ以前からラジオが広まってくると電波をとおしての口語体の情報が入ってきていたが、テレビはラジオと違って映像を伴っていた。つまり、ラジオには自分の日常世界や旅の記憶から想像するという行為が伴っていたけれど、テレビになるとそれがなくなる。当時人々がよくみていた相撲やプロレス、プロ野球は、目の前で展開されている出来事になった。ニュースも同じである。そこにはアナウンサーの表情や映像が伴われている。

こうして情報は、全国一律の、しかも時間差がなく伝えられるものになった。中央の情報が映像とともに口語体ですみずみにまで届くようになったのである。

人間を介して情報が伝えられている間は、情報の伝達には時間が必要だった。大事な情報は急いで伝えられただろうが、さほど急がなくてもよい日常世界の情報は、何かの折に伝えられる。ところがその情報は重要ではないのかといえは、村ではそうでもない。なぜならそれらをとおして村人どうしの意思疎通がはかられ、ときにそれが村人の合意形成に大きな役割をはたしていくからである。

もうひとつ、人から人に伝えられていく情報には次のような面もあつた。人から人に伝達される以上、そこには脚色³が伴われる、ということである。その過程で話が大きくなっていくことも、一部分が強調されることもある。だから聞き手は、話を聞きながらも、その話のなかにある事実らしい部分を自分で採りあてながら聞いていく。すなわち、聞き手が読み取るという行為が伴われてこそ情報だったのである。主観と主観の間で情報が伝えられる以上、それは当然のことであつた。

ところがテレビの情報は客観的情報として提示されているかのようにみえた。テレビが伝える相撲の結果は、間違いなくそのとおりなのである。もちろんテレビにも作り手の主観が介在してくるのだけれど、そこで映し出され語られているものが、あたかも客観的な事実であるかのごとく伝えられていくのがテレビである。こうしてテレビの普及は、口語体の情報であるにもかかわらず人々から「読み取る」という操作を消し去らせ、与えられた情報を事実として受け取りその感想のみを感じるという、情報に関する新しい作法を生みだした。

漫画をふくむ新しく創刊された雑誌も、活字が使われているにもかかわらず、口語体に近いかたちで語りかけられているものが多かった。人々はここでも、文語体で与えられた情報を自分の意識のなかで口語体に変換してとらえなおすという作業をしなくなった。

さらに電話の普及は、人間どうしのコミュニケーションから表情のもっていた役割をなくさせ、用件のみを伝えるというコミュニケーション作法をひろげていった。

同時に一九六〇年代に入ると、自然からの情報を読むという行為も衰退しはじめていたのである。農業の面では農産類が多種出回ってきたこともあって、昔のように自然の変化を読まなくても、被害が出そうになったら農薬の力で押さえ込むということができるようになった。また兼業農家化がすすみ、主たる収入源が「働きに出る」方に変わってくると、雇用された労働の方では自然を読む必要はなくなってくる。

一九六〇年代には、こうして、^D村人が必要とする情報のあり方やその伝達のされ方が大きく変わった。そのことがコミュニケーションのかたちを変え、キツネと人間のあいだに成立していた「伝統的」なコミュニケーションを衰失させたというのが第三の説である。

(内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』)

問一 波線部1～3の本文中における言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | 1 画期 | 2 喧伝する | 3 脚色 |
|-------|----------|--------------|
| ア 区切り | ア うそをつく | ア 時代の経過による変化 |
| イ 心残り | イ 言いふらす | イ 個人的な感想 |
| ウ 問題点 | ウ 正確に伝える | ウ 論理的な補足説明 |
| エ 違和感 | エ 誇張する | エ 面白くするための粉飾 |

問二 空欄 i ・ ii に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|----------|----------|
| i ア そのため | ii ア さらに |
| イ ところが | イ むしろ |
| ウ ちなみに | ウ すなわち |
| エ たしかに | エ しかし |

問三 傍線部 A 「こんな変化」の内容について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 敗戦から約十年が経過した一九五六年頃から、GDPが拡大する高度成長期に突入した。
- イ 都市の労働力不足と燃料革命を契機として都市で就職する農山村の若者が増加した。
- ウ 一九六〇年頃にはとくに都市部の生活において経済成長を実感できるようになった。
- エ 朝鮮戦争による食糧難が米軍の支援を受けて解消し、経済復興がすすんだ。
- オ 新しい生産体制による経済成長は都市の労働力不足を発生させた。

問四 傍線部 B 「自然が発しているメッセージを人間が読みとれなくなっていく」とあるが、それ以前の農山村の生活の特徴について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 自然や神々、歴史などに包まれて、経済的なものを否定した生活を送っていた。
- イ 燃料革命と農業の機械化の影響により、時間的な余裕があった。
- ウ 経済だけではないさまざまな尺度をもちながら暮らしていた。
- エ 軍事力の保持を放棄した絶対平和主義の道を歩んでいた。
- オ 科学、技術の振興による経済発展に成功し、家計収入が増加した。

問五 傍線部 C 「『科学の時代』における人間の変化」とあるが、その変化によってどのような人間が増加したか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 日本人の優秀さや精神力の高さを「迷信」「まやかし」として否定する人間。
- イ 新しい技術を開発し、生産力の発展に寄与することをすべての子どもたちに期待する人間。
- ウ 人間がなぜ生きているかについて、身体構造と生きる意味の画面から明らかにできる人間。
- エ 日米戦争に勝利するには経済成長や科学、技術の振興が不可欠だと考える人間。
- オ 科学ではとらえられない世界はすべて誤りであり、科学的真理を唯一の真理と考える人間。

問六 傍線部 D 「村人が必要とする情報のあり方」とあるが、一九六〇年代より前の農山村における情報の受け取り方はどのようなものであったか。本文に即して五十字以内で説明しなさい。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア 農村部においては一九六五年以降も自然中心の生活が送られているため、人間がキツネにだまされる話が数多く聞かれている。

イ 映像と情報の即時性により、さまざまな情報をあたかも客観的な事実のように視聴者に伝えるテレビの普及は、情報に関する作法を変容させた。

ウ 敗戦後の日本において、科学、技術の振興によつて経済発展をめざす方向性が国民的合意として機能し、科学はあらゆる問いに対して答えを導き出すようになった。

エ 人間と自然とのコミュニケーションのあり方は、農業における技術の進歩と働き方の変容などによつて大きく変化することとなった。

オ 日常語が文語体から口語体に変化したことに伴い、人間どうしの合意形成が円滑に行われるようになり、情報伝達の手がかりが飛躍的に向上した。